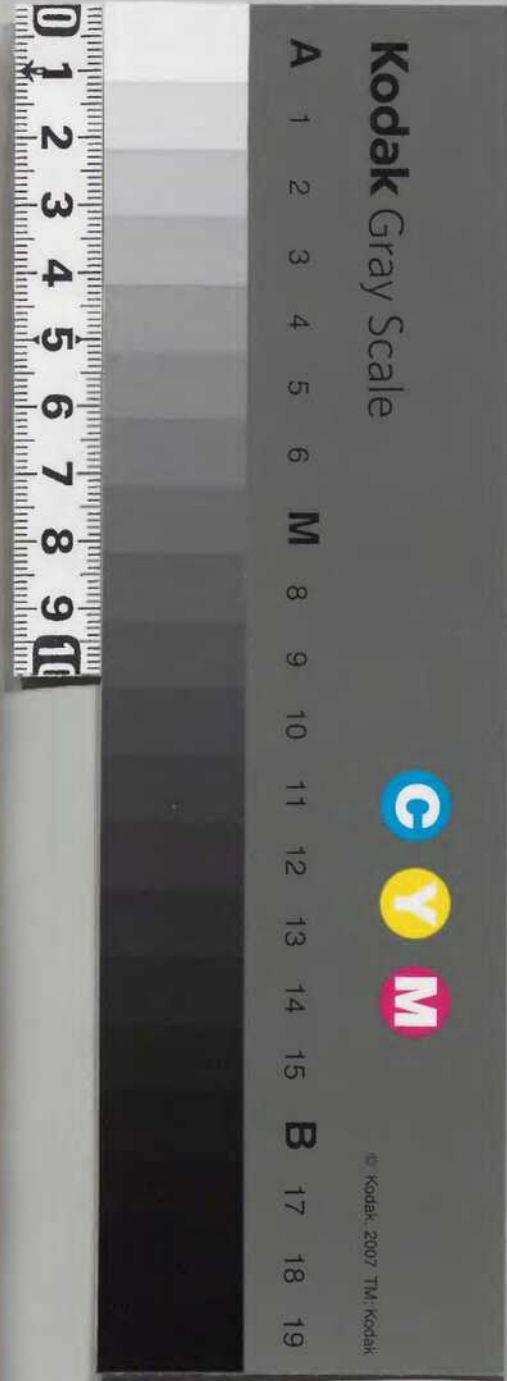
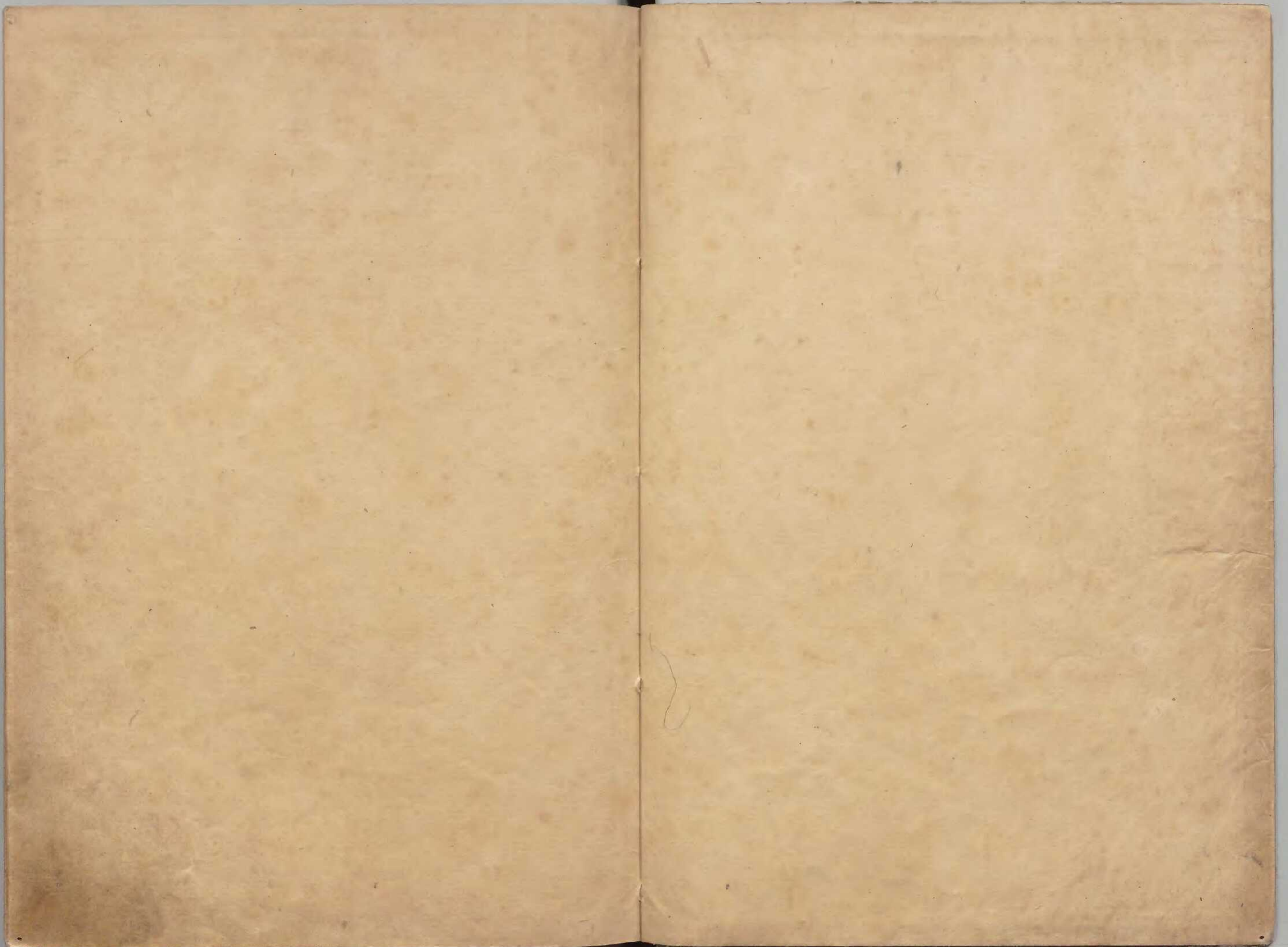


寛永諸家譜

宇多源氏
七卷之内

内閣文庫			
番號	和	20199	
冊數	186 (155)		
函號	76	1	





飛井

吉田

小島

永田

孫田

升田

寛永諸家系圖傳

宇及源氏

飛井

飛井の紀列の人ありて植積氏
なりて代つたかお雲守りし居子
り家臣の長とて是よりして
佐々木氏なり



宇多天皇八代
秀義

依る木之御と号す

保えの比

義清

五郎左衛門母之忍長各司重國が女
元暦年中平氏追討のとき軍功
あつたりしゆか雲隠彼西國と
傾とは名道清

泰清

行徳守 俊 逆五位上

頼清

湯七郎 左衛門尉 貞治の比
雲州に居候と是より後藤頼清
よりなりこれか雲州よりなり

恭信きょうしん

湯十郎ゆの じゅうらう

左衛門尉

應永のしんおうえい

云清いんきよ

湯源之

應永おうえい和の比わのひ

義總ぎそう

湯守ゆの まもり守まもり

康曆きやうりきの比のひ

政道せいどう

湯之五郎ゆの ごらう

兵部へいぶ少輔せうぶ

應永おうえいのしん

宗清しゅうきよ

湯之四郎

應永おうえいのしん

誠勝まことかつ

湯左衛門尉

寛正かんせいのしん

淨光 きんこう

湯丸 ゆまる

文昭 ぶんしょう

忠 ちゅう

湯谷 ゆたに

長亨 ちやうけん

養重 やうじゆう

湯播磨 ゆはり

文兼 ぶんけん

泰敏 たいみん

湯美作 ゆみさく

永正 えいせい

惟宗 いさね

湯信濃 ゆしんりゆう

永徳 えいとく

湯三郎 ゆざぶろう

長房 ちやうぼう

幸感

山中康助 七國公雲

幸感が傳と武苑守茲能が下は洋

下は

茲能

くは免の名は新十郎 武苑守は

飛井とありし心

厚子来りぬの守護となりて教代
四代徳とぬ厚子伊孫と久の時
ゆるそ智勇の令一清回とす
これ威しとるごふしや伯耆隠岐
とく孫領して大内女と雖もあま
三代の後胤伊孫と義久が母よりて
武藏伊孫と弛回民はしりしと毛利
元就ととと泰一永禄五年大軍と
後一ととと回しとるごふしや厚子お教代

事わつて順して富田の城と改り
元就秋に冬をそとく米と川筋と籍
取のつらう一國民被飢
同十一年より及く元就大より共と奉
く富田の城と心事救十日そ
我伐やまもあらとも毛利が平河糧助
との道が雷カとよみうて城さへ
を呼て山中藤助と藤原と決らん
とよ藤助が運い切あす救刻

道し組衛してうの首と九七年此
あつて藤助の雷名大をわす
あつて藤子義久とく人多くす
あつて藤子一族郎従他國より奔
あつて藤助のまゝ上の方よりゆこの
とき湯新十郎茲能十一歳のとき孤
となつて玄宇郡田舎に家を作し
なる家とあつて藤助より謝所

あつして麻助の家へいりて
十八歳なり麻助へいりて
いして居子の一族の中へ二府を
と後とくさすのばるるをい
あつんとおしり

同年四月中旬より此女と
是より書あつていりて
士飛井能くちしよのあり
いり居子久しはるる
いり居子久しはるる

いりて津國をいささ
いりて居子同姓とあり
いり浦と今よりいりて
いり書能くちしよのあり
いり名近國のいりていり
いりて飛井のいりていり
いりあ号と麻助まゝに
いり信長の真起とあり
いりいりいりいりいり

信長久しく其名を傳へて大に
あふふさきまゆ智日向ち丹陽と征
伐をもちかへら日向ちり取せられて
丹波初井の郷といひて三子人の月傳
とよまふいさき松永信貴は居
て伝へしうじ城守信忠を教
と日向ち先鋒の將とちり日向ち信忠
とせりんまらさき麻助といひ
茲能命とまきとまきとまきと

併よの子城中の川人純とまら
麻助といはく麻助これと避く川人
と但く家の下は茲能命を拜て
川人が首とちり日向ち首言檢
とといひて麻助と叫て言てい
と一方の大將とるる人自
分の高名今よりかあしとあは
るしとあは麻助深して我は
とあはあはす茲能命とあは

や下日向ち茲能と叫くは勇力
と感と日向ち丹波と征伐と数年
ありていまだ服せし床御切と立る
事ありていまだ人より目も又使
と信長より所よりいまだ取書
羽柴秀吉より取せんといふ信長
これとゆす

天正六年の春筑前ち秀吉播磨
入國中とす

とららるる麻物として佐用郡のら
上月の城とゆへ西國の押こ
秀吉去りてゆへ元利輝元五千人
の兵と後一上月の城とせありこ
事十餘年秀吉とすこころ
兵とをこ一軍回教とすとあり播磨
高倉山陣とす先鋒の兵元利
家の兵と致す事教度利ありあり
似ありといふかきは大軍あり

我兵を可人として是れを
くはわたり城下り近付事と
得た加勢と信長とて是れを
援州街道發ししは我兵は
しは彼中より敵ありと治ん
是れして是れを討て此利ありと
し信長群臣と議し依る信長
秀吉の大切とたけあしとて
是れを是れとて二月の加勢

とてしやし秀吉麻助が死せん事と
あられと茲報と呼告くし麻助
城より突あけ我兵の命と後
く引さるべしとて是れを
のまねんしを為り母りて是れを
はぐるしやあ敵ありとて是れを
しは是れをかるし信長は怒
小あらしむ哀しとて是れを
茲報といはく是秀吉の使あり

もかゝらぬ長のはつひにわ我たし
ゆゑして死なば申意ちりるゝ
ゆゑ下第一余の人として死す
く我々の面目のりくゝ志す
はくんとや秀吉より此理を腹して
いとゆゑ人ともりてりい付んや
茲船よりいゝ大野十右衛門
孫四郎二人と出づ具せんとい秀吉
先二人より此地とていふ茲船す

たしてゆゑに申すらぬらぬ
申すにゆゑに申す又ゆゑ
いと城中に入はかりしを火を
揚す六月すうの船茲船とい
二人城中より志のい入秀吉申す
いゆゆして合當の火とゆゑの別
し火とわげりる念の陣中
氣とゆゑに望みすお針て許
ときいし申物がいゝ城す無七

百人の命我々の命は安んずるを
やぶるも女病人の命は安んずる
ふとの物ごとくしてふの道人も人々
とて、この道も安んずるを我
かゝるも、この道も我一人版と切
て救百人の命も、この道も我一人
乃原忠謝し、この道も我一人
と告ぐ、茲能く、この道も我一人
まゝす、この道も我一人、この道も

る、この道も我一人、この道も
と、この道も我一人、この道も
刀と、この道も我一人、この道も
我一人、この道も我一人、この道も
み、この道も我一人、この道も
し、この道も我一人、この道も
と思、この道も我一人、この道も

赤井五郎石川乃士福屋長太郎及
茲能人として同州麻野の城と
西り一む鳥丸の城と去り四里
なり毛利家吉川式部守備久森下
市羽入道乃中村為馬春次とて
一と西り一む
同十月秀吉始治りりり鳥丸
又軍あり一と同く松原七郎左衛門
意木平定祐子田平左衛門十之助と

此の一麻野の城の將と石川
一む松原木吉守り一と意麻野此城と
去事二里なりし家より使と馳て
秀吉の旨と告武田赤井祐之助の
を命よ意一城と一と去事
ゆく茲能獨居いり西四里要
乃城と西り一家の面目士の布意わ
款多とて大軍なりいしと必
け城と西り一討死と一祐之助の

くいやしくもあつて
使と馳せりあつて
十二挺の将は勇猛と感し
の鉄炮二十挺と玉葉とおう
英令十枚と送る武田赤井
非海しゆく鳥丸の将麻野
人しゆくまよりをめて
と後一是とせんとあ
實くもお高ふ事殺十度
自分首と

斬す五級百しび
此兵も又来るぞ麻野
小り文吉の城あり毛利
をすしゆしゆ茲能兵と
し高丸ら運ととく物事
浮としゆふとぬつら
し麻野の城し
破布と

同九年の春秀吉令報と持ちて高人
とけりし為に迫るの米穀業業
新島ホと買ぬ六月廿五日大軍と被
し為ぬ此城とをぬかこむし百餘
日城中糧盡人飢吉川森下中村赤
福克小之助とて使へし後北長政
し通下ていもく之將自殺とて
承りし可人の命をぬすけり
秀吉是をみてその約束とてこふ

て酒肴と城中は送致十月廿五日
吉川隆久森下道与中村春次自殺と
しつゝ城中の士民とあつて秀吉
城に入交るる甚く祥符とつゝ城と
し其日ハ茲能はりていはく麻
野高丸とて守事四里西に
敵地へ逃し二年の籠城粉骨の
事なりし其功新謝しつゝ
と感下白銀三百枚并り瓦元此馬

新也く海より且懸賞の地こ
て同洲氣多郡一万余八千とあり
ゆこなる

天正十年秀吉毛利家と退治せん
るして中国へ進發し後中言松
乃城とせしるるに河川と引て城と
ゆこせり毛利輝元と松ともく
がゆり五千人といさひく秋か嶽
し陣とる秀吉此陣とるゆす

二里余のふりゆり人なる秀吉和
儀とるのふ六月二日明智秀吉は佐
とうらゆり告わり和儀とるゆり
やぶきんととも小半川澄家とる
るの清水とる切腹して高松の城
没落とる毛利家とるゆり人質
とるゆり秀吉用陣とるゆり
播磨の作海とる徳将を焼して
明智と誅戮とる軍法と儀とる

後能秀吉よりまゝに世に傳へしは
和歌の國とわらんとして
信長より達と云ふ道とて海和の
輝えりお雲中國とわら
他邦とていひく道とのぞし
と後能よりいひく今不の智と
殊せられど六十余州風とのぞんで
麾下の多とて我日中として
のぞみなり終つて琉球とて

秀吉は此壯勇として御腰の
圓扇と振く素は琉球守殿と申裏
より秀吉と書く判紙とくはへ
てり後能より終つてり同様
を為さるわやく物々床の城と
ゆりてりと家とていひく道とい
りきり同判紙と物々
同十三年後五位下と叙し武統と
しは

文禄元年秀吉朝鮮と征伐し何
茲能進といふつゝ琉球國と好領
のうへはけ度琉球征伐使の山本宗元
多まゝと秀吉やじりて地を
して是とてふ茲能船艦五艘
と仰り二千五百人と仰りしは肥前
石橋屋とて秀吉とて得ん
家とてしひく秀吉此仰りしとて
朝鮮と琉球と命とて征伐せし

兵とてしひく秀吉一琉球の退
浪止りし及び朝鮮と征し家物
となし先軍同甲斐守長政とて
し朝鮮の都入りて茲能人
地とて切とてし人事を男とて
殺し黒田とて命とて自分の兵と
とて舟とてしひく朝鮮と
へ命とてし秀吉とて地とて
釜山浦とて命とてし松坂千艘

し逢石火矢とふ川と茲能の舟と
燒くも茲能の舟とを——と
先種川の城は撥中七十余日晋州
と去るの二里余又種川より西小倉
了右城あり徳野新文が撥する
ちわ三奉り書とさつそいそく
新文ハ徳川より入るも茲能の
右城より入る是と留る——と
ましり種川と樓拂右城了

し所り指り扱月新解の兵これと
せし茲能初く戦あり扱度逐る
居せど又波年の事お秀作牛を
とくり——と右城をすくして
谷山浦は城あり——と扱日の扱新解
又波船千余艘と出り谷山の兵これ
し茲能右城は撥時貴船逐りか
し今右城とを——と扱新海に
扱新右城新解の款強大小し

然川を急ぎと侵も日中乃將晋列と
せりおとらんがためと又名小名二百余騎の
兵とてさしひく是とせむ城申兵と
あしと戦小利ありてしと引退く
秀吉大よ怒くあしとて大軍と敷し
晋列の城とせ破りけ何り申の法物
蘆川の城の晋列とてさしひくは
保ちと感と又改年の寧おの兵千余人
東右部城と新なる鶴野人救万是と攻固城

中か得とよと家より茲能として
右部城の兵と引くは茲能我兵と
しとて首とさし十五級城
又入とてさしとやとみ申中
右部の兵と引くは登山海城
同年横張の城と居と十月十日
朝鮮人救万とてさしとてさし
茲能城とてさしとてさし

津うらりり教日軍儀とさく先
茲能中多と野々成康年合と
一取後の病よ作とされら御前
しりめは茲能懐中しり一身の状
とあは是上方を郵の書なり
又控現らまると台治んありてしり家りら
也しりまよ茲能奉書と川やあ
懐中しり入是しりしりて枝赤心と
あ

又友寺佐渡と山岳道河孫とりて使
かして上方の法おしりつけくのめ
いくを治徳とまこあしり下向の使
偏是しりしりあちりまわといて
書子程と改しりあまげしりか
いと偏と孫りる今日しりしり
とてしりたわ茲能いしりしり
あまよとまよしりしりしり
者しり我しりれしり命しりしり

うらやらんげとて一最骨のいそ

御傍いん茲能がいそ只

大控現よりけく人多くまうて二

の忠と存じし上野今年人正も又

かみりて一是下りてあてなく

茲能が大減と志所

大控現上方に進發ありて開ヶ原

とひく入り我ひ通し石田とそり

こころしきふいとま茲能軍切あり

大控現入津り減るうつて皆ま茲能

いとま代給りて圓り抑り同様

一圓東伯脊すまをけそ

か場こ小者大和吉別へつ不巻た

糸和石巻末三人うりて糸和の飛

あそく津せし新同州伯州卒法して

茲能大坂よりゆくりか添りて

同州高草部と取籠と

号長十七年正月廿六日二年と

歳辛六 法名中山道月

改葬

新十郎 太吉宗佐 故の老翁より改
尋長九年改葬後又位下を叙し
太吉宗佐 改葬
改葬年久し於今成徳年人正とありて
改葬の教の成徳年人正とありて
ありて改葬の教の成徳年人正とありて

了を仕るといふ人これと
大権現了達と

翌年十月朔

大権現伏見より江戸へ御下向のとき
改葬と供養の列よりく之れ
江戸より十二月

大権現よりけしめと

台漣院殿了達よりともつり古井
大炊頭清田長平よりて改葬と

一政維の家より取具し敬旨

とけふはけふ太皇太后の御成敗
を前ちと号し

同十四日四月中旬 上念より政維

松平周防守康重の女と娶

同年

名徳院殿より伯耆國よりといく政維

五ノ名の地と取領し

同十七日又茲維平と九月七日同様

四ノ草氣多ありと取領し伯耆國久米

川村郡の内五千石の地といく部

二万二千石と領し

名徳院殿より進目より御判と給り

同十九年大坂の陣より江戸より伏奉

これより白銀百枚と給り

此より一萬石後備より人取一千七

百人と取具し大坂屋山といく

黄令三十枚といく

同二十年大坂軍乱のとき四月廿二日
同列麻野の城と市伏見より伏奉
して千多依流ち細く一旗
千乃前倭より伏見

元和二年同列麻野の城と將して
石列為松津和野の之本松の城
うけり居

同二年五月福鴻正則罷りて欠同
のりて女後對馬ち永井右を大吏と

同列一西國の人名と云ふは同列
廣瀨の城とけり家何よ改能病
了脚と云ふ道と云ふと後一宗興
しとゆゑと將り此病の甚しき
と云ふ國よ物しと云ふ
と云ふ改能は云と云ふ國の城と
後と云ふ津和野の城はゆり保老
七月申旬對馬ち右を大吏同申の

経能

権佐

寛永七年二月廿日

名酒飲ぶ福一々あり 約會

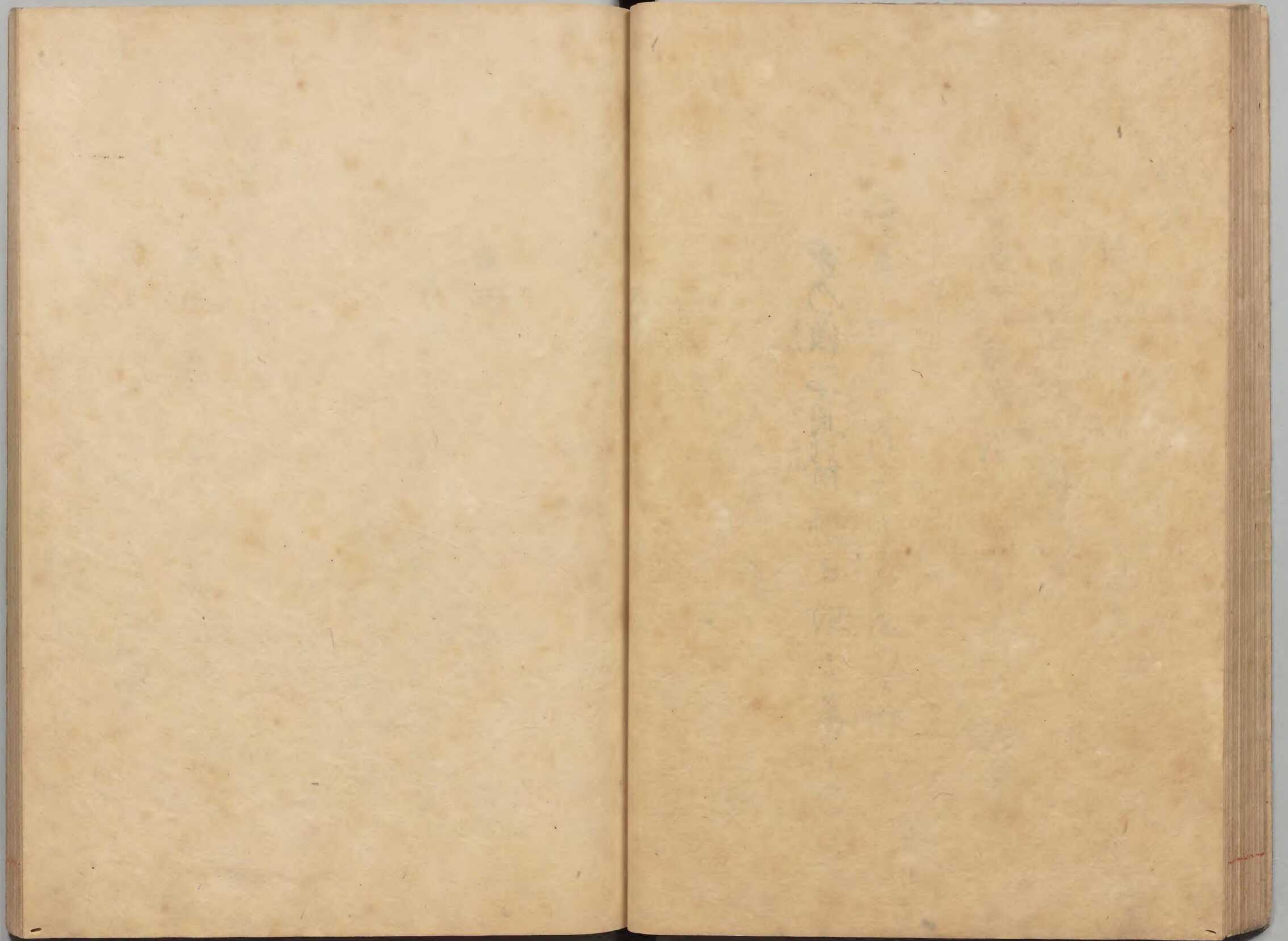
しりて

將軍家より所々へおつる時

十七歳喜山園橋と組より

御書院奉とつて

家乃紋目結



● 家久いえひさ

信長のぶなが 主水しゅすい 大系おほけい 子こ

信長のぶなが 子こ 四冬よふゆき 法名ほふな 孝室たかむろ

右回みぎまわ

右回みぎまわ 一ひと 本もと 之の 郎らう 秀ひで 義よ 六む 男おとこ 嚴えん 秀しゆ 七しち 右回みぎまわ 一ひと 号ごう 之の 嚴えん 秀しゆ 乃の 二ふた 男おとこ 義よ 久ひさ 之の 流りゆう 也なり

家次

之水 右系子 牛回瓦張
信長了了子 法名孝信

家隆

之水 牛回瓦張 隆又洗は他家
信長及信隆よつて 後秀吉
つと後又五歳苦力と先容りて
入於現は信長の子 法名孝元

政形 家次 家隆 信久之の身原

信久

多太馬 牛回同也

入於現は信長の子とす
信の御子長とす
入於現亮也のとも子
信とす 信とす
名酒院殿は信とす
將軍家は信とす

政歌

市原鳥 牛玉同お
信長しつ子

政永

政就 牛玉同お
駿河よとむりか
大権況とむ

名徳俊敏

將軍家より所へるし牛玉同お

政成

助信郎 武就忠城よむら
將軍家より所へるし牛玉同お

家馬

長右衛門尉 牛國瓦張

信長一子 法名 紙董早久

家政かざい

志助 牛飼分

信長一子 牛飼分

大権現一子 牛飼分

法名 昌白

政名

五郎左衛門 牛飼分

大権現一子

名 権現殿

將軍家一子 牛飼分

政勝

清左衛門 牛飼分

大権現一子

名 権現殿一子 牛飼分

法名 宗藏

政廣ひろ

信六郎

生年未詳

名 信俊のぶ

將軍家一子

家内紋

鳩つばき 駮はら 草

集

名回

日垂^{ひさ}海^{うみ}正^{ただ}

修^い養^がの^た國^{くに}の^ま名^なを

射^や落^おし^た連^{れん}一^{いつ}下^{くだ}り^した^た

いづ^いま^まも^もな^なの^の門^{かど}系^{けい}救^{きう}命^{めい}の

や^やい^いも^も吾^わ回^{わい}お^お雲^{うん}守^{しゅ}ひ^ひと^とあり

う^うの^の妙^{めう}と^とつ^つふ^ふか^から^らが^が持^ぢへ^へり

お宝号とて家傳と傳し
通寶より下世に傳るるを
と稱し 法名を傳

某

吾回出雲守 口列人
代々依々本傳下七人
法名通寶

某

出雲守 法名一鷗

某

出雲守 法名落偏

某

助右衛門 法名道春

重氏

浪八郎 一水居士と号す

秀次^{ひでゆき}の^{ひでゆき}所^{ひでゆき}之^{ひでゆき}也

秀康^{ひでやす}郷士^{ひでやす}と^{ひでやす}号^{ひでやす}す

所^{ひでゆき}之^{ひでゆき}也

又^{ひでゆき}於^{ひでゆき}此^{ひでゆき}也

名^{ひでゆき}德^{ひでゆき}院^{ひでゆき}殿

將軍家子^{ひでゆき}湯^{ひでゆき}一^{ひでゆき}斗^{ひでゆき}也

寛永十五年三月三日^{ひでゆき} 歳七十^{ひでゆき}一^{ひでゆき}斗^{ひでゆき}死^{ひでゆき}す 法名^{ひでゆき}平^{ひでゆき}如^{ひでゆき}也

重信

久之助^{ひでのぶ}

寛永四年十二月十六日^{ひでのぶ} 酒井^{ひでのぶ}非^{ひでのぶ}重^{ひでのぶ}氏^{ひでのぶ}

濱波^{ひでなみ}と^{ひでなみ}先^{ひでなみ}容^{ひでなみ}と^{ひでなみ}号^{ひでなみ}す

名^{ひでなみ}德^{ひでなみ}院^{ひでなみ}殿^{ひでなみ}

將軍家子^{ひでなみ}湯^{ひでなみ}一^{ひでなみ}斗^{ひでなみ}也

家ノ紋 右ノ次ノ紋
佐々木より之目録とす

吉重

太郎吉重

生玉同分

吉次

太郎吉次

生玉同分

信玄了所子

吉田

大杉現とよむ

台徳院殿より所へ多々申付

政勝

控八郎

武親忠誠より

右徳院殿とよむ

將軍家より所へ多々申付

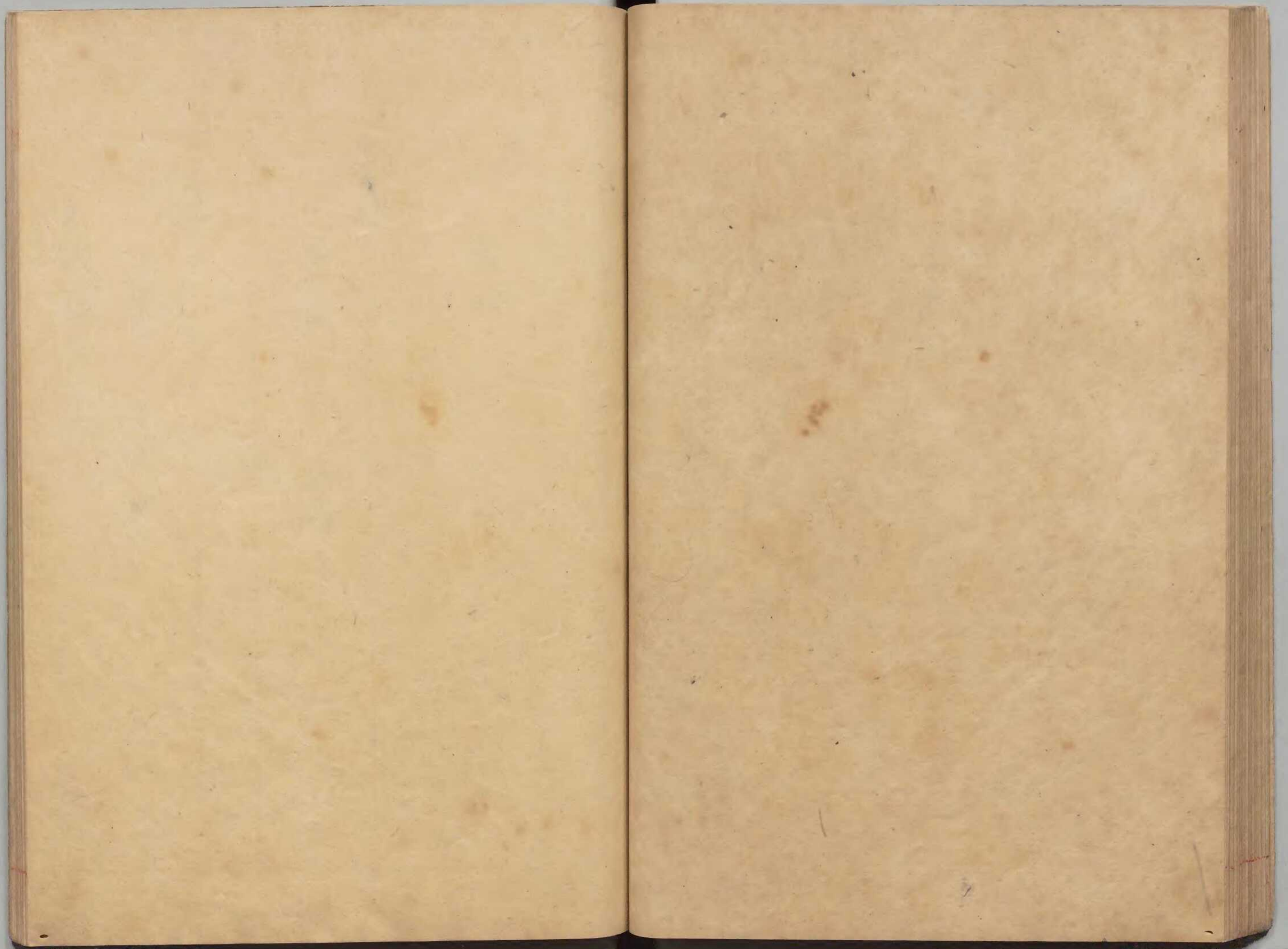
政俊

控八郎 右徳院殿

將軍家より所へ多々申付

家内紋

鳩駮草



右田

● 正次

右大馬

右四瓦右ワ港

正重

正重

右四瓦

右四瓦

台徳院殿

將軍家一ツ一ツ為さくまの

政重

基太郎 生國武苑に

台徳院殿とよむ

將軍家一ツ一ツ為さくまの

正定

与助 生國武苑に

十六歳ありて

大於現し所人しつまつ後

台徳院殿とよむ

將軍家一ツ一ツ為さくまの

寛永十二年己酉四月十二日死す

法名を盛

正之

と助

武藏忠成

同十二年

將軍家一子

家の紋

鳩殿

● 特勝

右田

小岳 生國 長安 所加村

信長 了了

号長十五年 病死 六十五歲

法名 道久

正時

四郎左衛門 生國日前より大坂

了居

元和三年五月七日大坂落城

同日廿七日

大坂現と云

名徳院殿より所へ

三藏

四郎左衛門

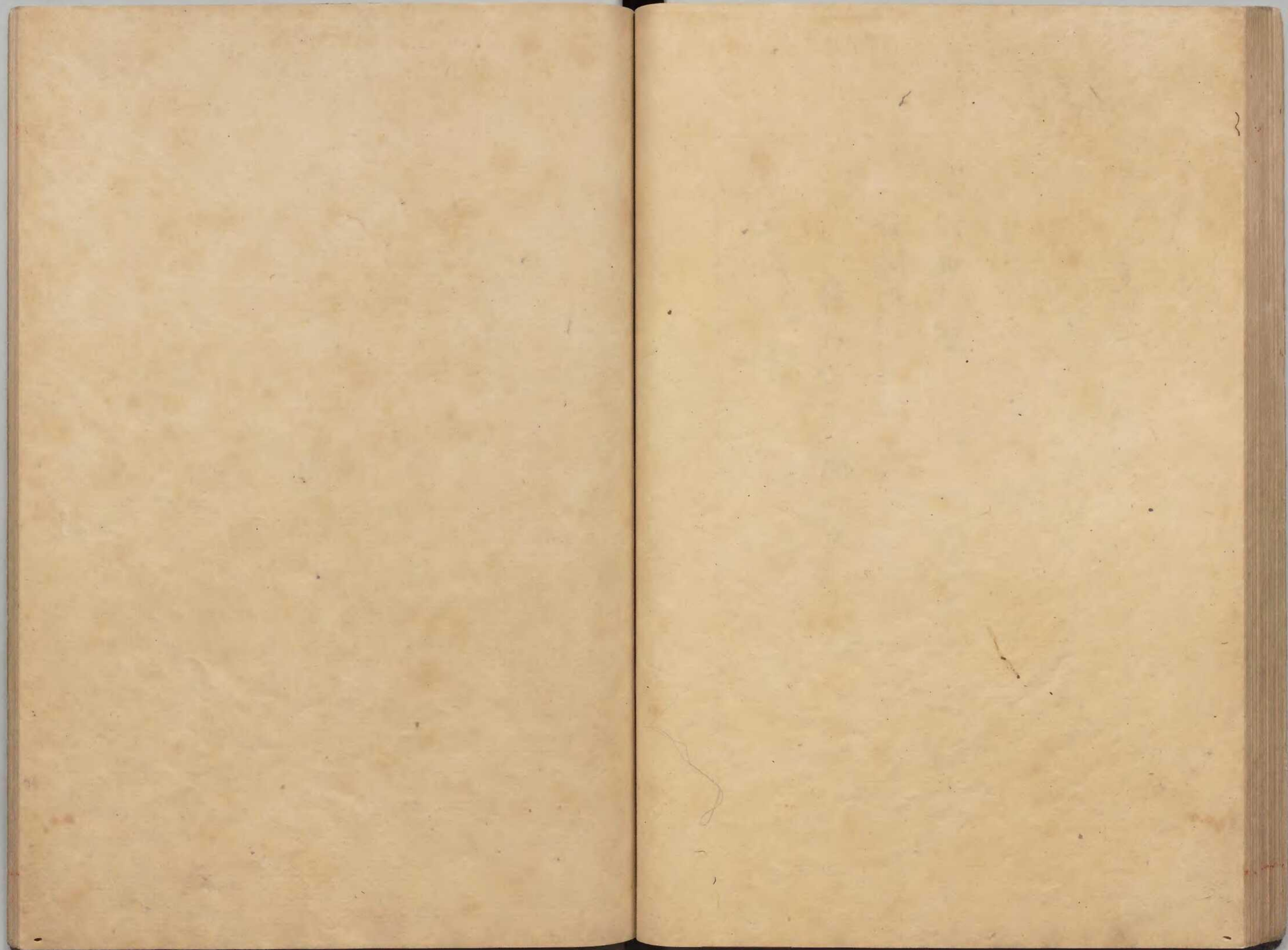
橋本大坂より

名徳院殿より

將軍家より所へ

家の紋

為酸年



正澄

小福

源太郎 生國
佐々木 兼頼 属

正守

物部 十国

かりあつたといふほどか何となく
折らぬものな一室にありては
正春とていふ字を友人すみみ
寄すといふとよまに歌味方の
正春の通用なる一室とて先
年筑お中納を秀秋より道阿弥
とく家よりあの程に皮のこ
をとりて右友人のちる一
秀秋といふとていふ正春とつ

と正春より友人をいふとて
秀秋よりりりり柏原のこ
ううう秀秋の家は平思ふ
とていふ役のおとけを正春
正春二人秀秋の寝回をゆき
道阿弥の上のじゆん秀秋
もらゆく赤坂素のこけり
上方の神と神んらりきり

正名、柏原より秀秋の逃状とす
く、中野へ之を通河津より
正重よりくるべく、秀秋の
逃状とす、け、河津より
一撥とす、之より、大津へ
之城とす、之より、若御
を河津へおとし、一撥とす、
既、大津へ馳向、之より、永原
大津落城のり、とす、此より

引つくと、内用ケ、尔の合戦あり、
三成敗亡とす

正次

助大津、生國、月本

大津、現とす

名、酒、院、叙、し、所、ふ、ま、り、か

享、長、十、九、年、大、坂、御、陣、後

将、軍、家、所、留、り、く、ま、り、か

正治

六之助

生國武統

寛永十二年

將軍家と相し

正久

七之助

生國日向

重利

六之助

生國日向

正盛

九右衛門

寛永四年十一月廿二日

右衛門殿と相し

將軍家と相し

三勝さんしょう

卯一照

生國なまくに

盛後もりご

助九郎

生國なまくに

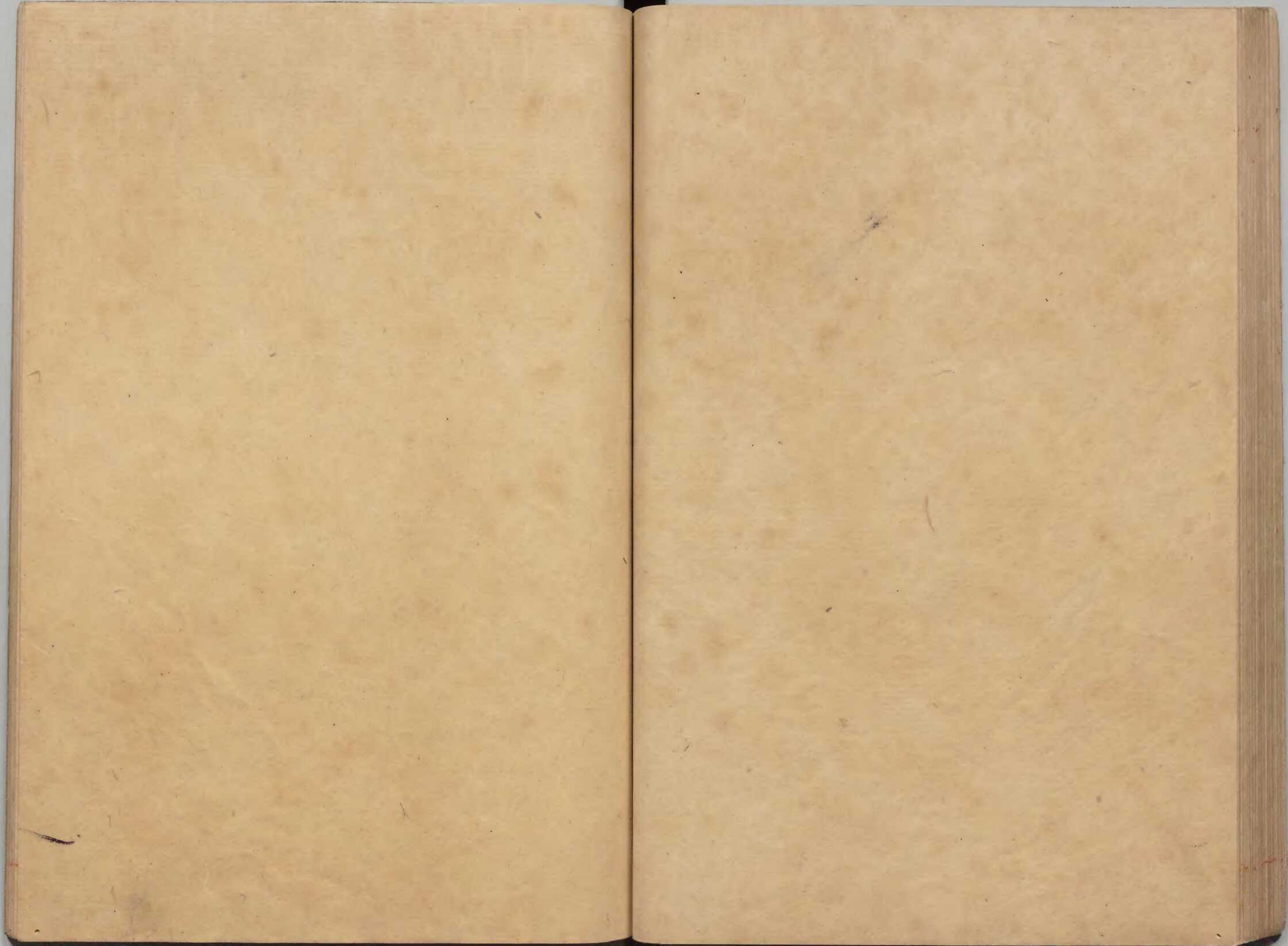
盛定もりぢょう

三助

生國なまくに

家ノ紋

丸のうら
把たまり楯たまり



正貞

永回

刊形補 世國を以

信長は小遣夜のとき書と正貞より

へ御つくりいしく林をなす書と云

賢田此士と早船の書くは水より

しるる一と打らりりめら信長

書とふ所了所よ
意不中意人來月七
於江小石口
お働不遠時刻不寄老
あ投
表へ丁打書作納紙
包てお構
御紙
己下中付て
持ぬも
廻文
抄紙ト
以て
御

二月六日

信長

朱印

永向利の物成

又書所よ

今兄九日
左馬込
と力家
来ち
居
方
再
も
方
自
然
紙
知
己
下
不
可
有
相
遠
次
高
津
部
内
中
和
向
不
知
方
事
お
本
意
上
下
中
付
孫
太
傳
管
需
し
紙
状
の
件

元龜元

信長

五月七日

朱印

永向利の物成

貞行 まことゆき

孫次郎 生國武藏

大権現とよび

名流院殿より所へ〜〜〜
四十余歳少く病死 法名淨覺

正次 ただつぎ

孫次郎 生國武藏

名流院殿とよび

將軍家より所へ〜〜〜

寛永十八年二条の城やましろ中なかより病死 歳七十七

定正

御子 生國武藏

元和九年十一月

將軍家より福〜〜〜

正勝

次左馬

七國目赤

實父ぢやうふ右小長谷こながたに左ひだり實時ぢやうじ為母むかへ吉正きちぢやう次つぎの女をんな

家内役 口目録

● 某

横回

印付原の称号より延平氏なり
十郎三郎横回俊中と書きたる
小乃少一横回と号す

倭中書 牛國通
信州戸石余哉
討死

集

十郎玄求 七回甲斐

實吉原守忠ちり子なり孝子とちり

く横田此家と所く

糸川長保了りといく討死

尹松

基右馬尉くう此名基五郎

又の名付玄 七回甲斐

天正十年くうめく

大於況了りけくちくまのり

大於理尹松とらび甲川の士とて

信川芦田小屋了りけりりこま

まのり心

同十二年長久手津了り信守

同十八年小田原御陣了り信奉

同長五年開ヶ原御陣了り信守

孝くまのり

大坂支那の西陣一侍奉る

名徳院殿と

將軍家へ侍る

寛永十二年歳八十二少く病死

法名通中

政松

五郎之郎 牛國後河

大坂西御陣一侍奉

元和五年四月廿五日一十三

病死法名淨花

澄松

五郎之郎 牛國武藏

寛永五年十一月一十三

名徳院殿一侍奉

月九日小折紙の香と

系松けいしょう

基五郎

上國武苑

保松たねしょう

尾知傳五郎

生小国前

尾知勤を求むる子と云ふに此ゆへ

氏と尾知とありし心

尾知家の紋竹子虎

垂松たねしょう

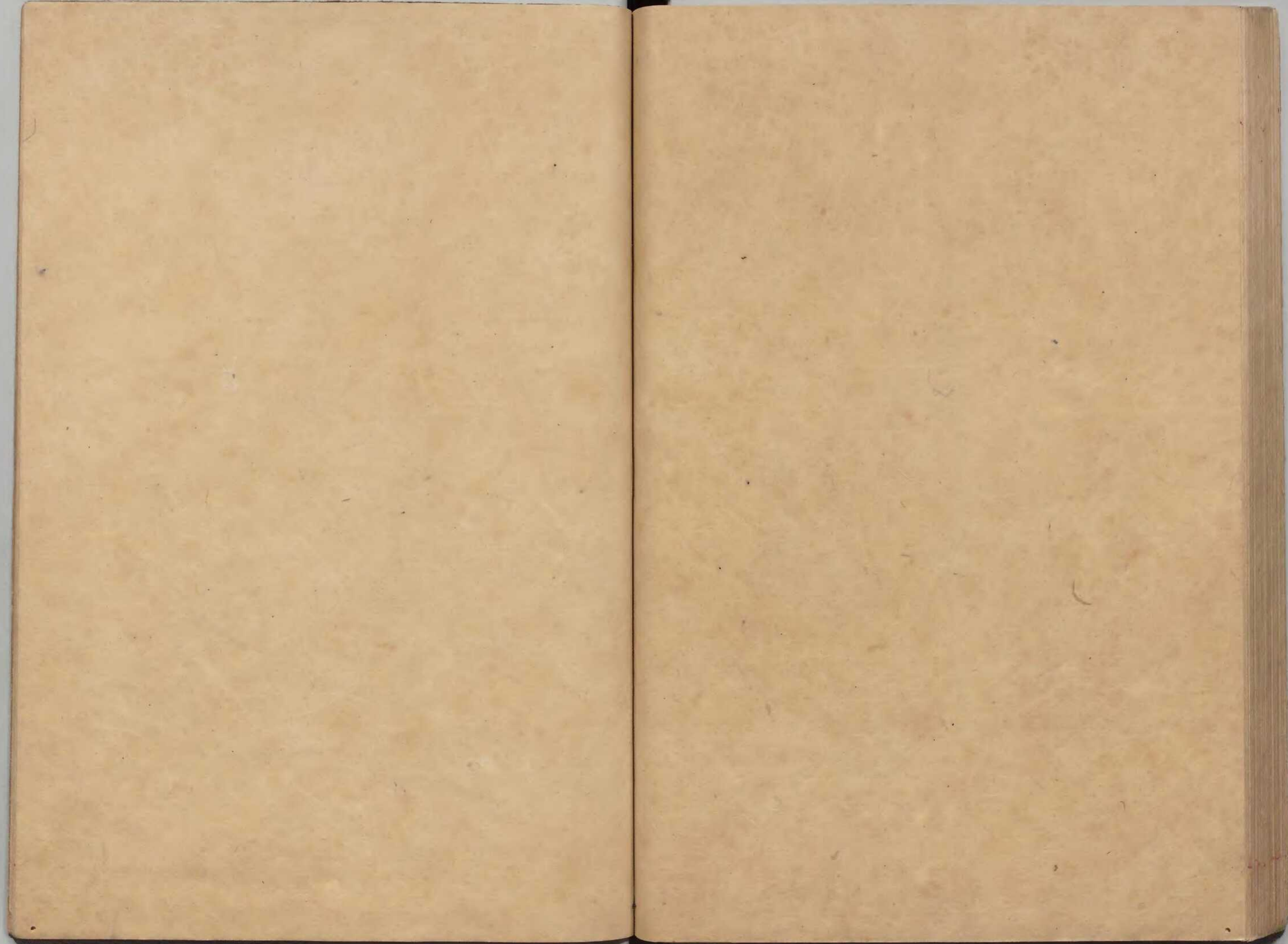
又十郎

上國月前

家の紋

口圓結くちわらひ

釘接くわいせき



高次 たつぎ

次高馬

牛國見か

● 高俊 たかう

高俊助 牛國見 うま
高井俊前 たかいしんぜん 高井 たかい
高井 たかい 高井 たかい 高井 たかい
高井 たかい 高井 たかい 高井 たかい

井口 いのくち

